



TITLE:

## 4.6 花山天文台に集った天文愛好家たち (4. 花山天文台の思い出)

AUTHOR(S):

富田, 良雄

---

CITATION:

富田, 良雄. 4.6 花山天文台に集った天文愛好家たち (4. 花山天文台の思い出). 花山天文台70年のあゆみ 1999: 62-64

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/241452>

RIGHT:

## 4.6 花山天文台に集った天文愛好家たち

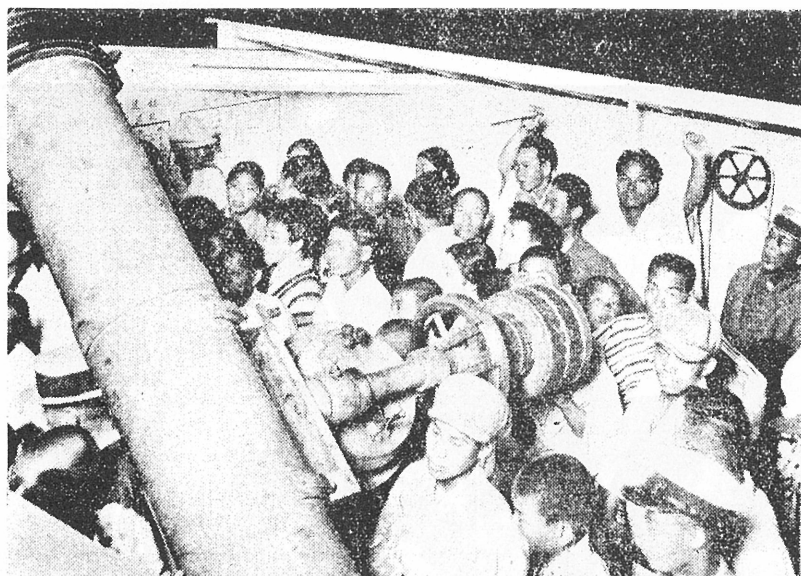
富田 良雄

千二百年の都であった京都はその文化的土壌を背景にして歴史時代を通じ天文学も盛んであった。明治以降の京都における一般天文愛好家の活動を考えるにはこうした歴史的背景も考慮する必要があるだろう。そのひとつは飛鳥時代の天武・持統朝に中国から導入された陰陽道を、平安時代になって家業とした加茂家・土御門家の暦算天文学であった。これは天皇のために暦を編さんするという官の仕事であった。一方16世紀になると西洋文明との接触が始まりキリシタン宣教師がもたらしたプトレミーの天文学が京都の知識人に与えた影響は大きかった。天文道を家業とした加茂家の中にもキリスト教に入信する者が出たようである。

江戸時代にキリスト教は禁止されたが、知識人に与えた西洋科学の影響は未永くのこり、吉宗の時代になって天文学を含む書籍の輸入解禁にともないいわゆる洋学は第一次の隆盛を迎えることになった。そして江戸時代後期になると庶民の天文ブームとなって現れることになった。京都におけるその最も特筆すべき事例は、寛政年間に伏見の医者橘南谿宅でひらかれた日本で初めての天体観望会のことであろう。後に遠眼鏡製造業者として名を馳せた貝塚の岩橋善兵衛が初めて完成させた屈折望遠鏡を持参し、京都の文人十数人が太陽、月、木星、土星、プレセペ星団、アンドロメダ星雲などを賑やかに眺めたのであった。この時の様子は伴蒿蹊の『北窓瑣談』に観測記録も含め詳しく記されている。それによれば、これらの人たちは天文学に関してはアマチュアであったが、少なくともガリレオが初めて望遠鏡で天を観察して記した『星界からの報告』の域には達していたようである。

明治維新により都は東京に移り、暦算天文学の土御門家も京都を去った。しかし医者、宗教者、画家などの文人を中心とする文化的雰囲気は失われることなく、出版業などはその後も東京を凌駕していたのであった。今でも京都の旧家では古文書とともに天文図などの資料が見つかることがあり天文学に対する関心は連綿として続いている。そうした土壌の上に明治30年京都帝大が創立され、会津出身の新城新蔵教授によって宇宙物理学教室が設置されたのが大正10年のことであった。

京都帝大の山本一清、古川龍城を中心にして大正9年に結成された天文同好会（東亜天文学会の前身）は数年にして千人を超える会員を集め、関西を中心に東北から四国、満州にいたる地方支部を置き活発な天文普及活動を展開していた。そうして天文に対する一般の関心が高まった時期、東山の一角に白亜の大天文台が創建されたのであった。一般市民にとって花山天文台はあこがれの地であり、一度は訪れて大望遠鏡で星をのぞいてみたいという希望は高まるばかりであった。創立当初から花山天文台では一般市民の見学を歓迎し、山本台長自ら連夜市民へのサービスを行っていたことが天文同好会の機関誌に写真入りで記録されている。また、熱心な天文愛好家に対しては無給ではあるが天文台の観測助手として天文学の研修を許可し、太陽、惑星、小惑星、彗星、変光星などの観測家の育成を図った。当時の花山天文台には常時2～3人のアマチュア出身の無給助手が住み込み、大学生にまじって天文台の仕事を手伝っていたようである。こうした普及活動により、倉敷、和歌山、大津、岐阜、上田などには天文同好会の会員によって民間または個人による天文台が創立され、太陽黒点観測、火星、木星表面観測、小惑星、彗星の発見観測、変光星の観測、流星群観測など現在の日本のアマチュア天文家が得



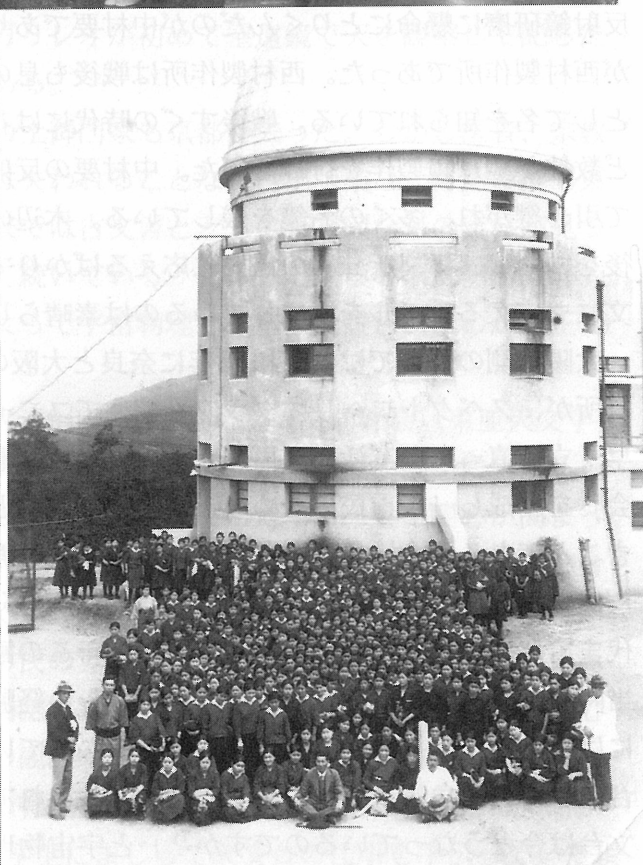
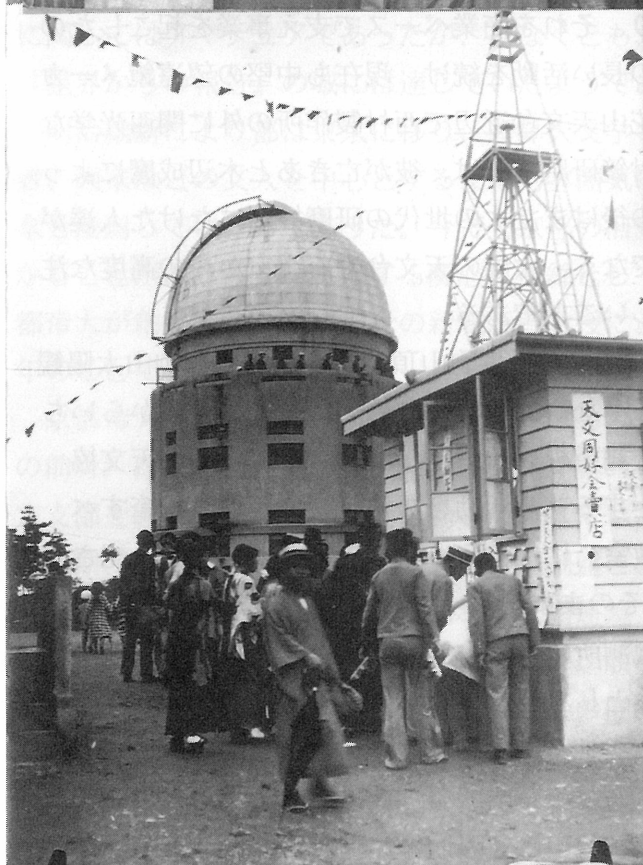
Winnecke彗星観望会（1927年6月27日）、倉敷天文台の32cm反射望遠鏡に600人のファンが押寄せた。倉敷天文台は花山天文台創立とほぼ同じ頃。地元のアマチュア天文同好会会員の水野千里氏の奔走により浄財を集めて設立された。  
（「天界」第7巻第78号より転載）

意とする分野が確立されていったのである。また、大学を退官した山本一清は、実家のある大津市田上に田上天文台を設立し、現在に至るまで天文愛好家のメッカとなっている。

天文台での観測機器の開発と一般愛好家の望遠鏡に対する需要に応えるために花山天文台で反射鏡研磨に懸命にとりくんだのが中村要であり、それを商業ベースで支え事業を起こしたのが西村製作所であった。西村製作所は戦後も息の長い活動が続け、現在も中堅の望遠鏡メーカーとして名を知られている。戦後すぐの時代には花山天文台近辺で西村製作所の外に関西光学など数社が望遠鏡製作を行っていた。中村要の反射鏡研磨技術は、彼が亡きあと木辺成麿によって引き継がれ、多くの名鏡を残している。木辺の後にはまた次の世代の研磨技術にたけた人達が後をついで、アマチュアの需要に応えるばかりでなく、大学の天文台や研究室からの高度な注文にも応えるレベルを達成しているのは素晴らしいことである。

太陽観測の分野では、昭和15年に奈良と大阪の境にある生駒山頂に設立された生駒山太陽観測所が、スペクトロヘリオグラフを備えてユニークな研究を行っていた。戦後の荒廃からいち早く立ち直って研究活動を再開するとともに、観測所のメンバーがよびかけて「生駒天文協会」を結成し一般市民のための天文講座を中心とする普及活動を開始しているのは特筆すべきことであろう。協会の機関誌であった『天文教室』にはそういった活動が生き生きと記されており、この時期生駒に集った人達の意気込みがそのまま伝わってくるようである。また1960年代までは宇宙物理学教室の学生実習が毎年この観測所で合宿しながら実施されていたことも、当時学生だった人達の厳しくも一方で楽しい経験として語りつがれている。生駒山頂には観測所に隣接して近鉄の遊園地がおかれていたことから、近畿一円の人達になじみの天文台として、三角帽子の塔のある建物は親しまれていた。いまでも「若い頃に生駒で見たあの天文台は今どうなっているのですか？」と宇宙物理学教室にも問い合わせがたまにあるそうだ。

以上、具体的な名前や天文台名のほとんどを省略させていただいたが、花山天文台にゆかりの天文愛好家の動向を簡単にのべてみた。昭和初期から戦前のある時期までに花山天文台が熱心な愛好家を育て、学校教育に与えた影響は大きかった。



昭和初期の花山天文台一般公開。天文同好会売店という文字が見える。

天文同好会とは、現在の東亜天文学会。